



私は学生時代を含め約40年間、建築構造に関する研究開発に携わって来た。ゼネコン在職時は大規模な構造物（エネルギー関連施設・容器構造、大空間を覆う構造や次世代の超高層の開発など）に関連し、主にシミュレーション技術の開発や実施への応用の面で若手として加わり、大学に異動後は基礎研究や関連するガイドラインの作成や地域活動等に軸を移している。目の前の課題に追われる中、何回か思い出し、考えるこ

技術者・研究者と社会

迷わず取り組んでいた時期であるが、都内の勤務先到着後に休憩コーナーで3回、報道に人だかりが来た。最初は1994年1月17日（現地）にロサンゼルス（ノースリッジ）地震が発生し、高速の高架が崩落し道路でガス爆発が起きていた映像（日本ではあり得ない…と同僚と話しつつ先進国で、という違和感）。2回目は偶然にも1年後の同じ日付、阪神・淡路大震災の被害が刻々報道される。3回目はその約2カ月後に、自身が直前に通過してきた地下鉄の駅での毒物騒ぎ？（徐々に地下鉄サリン事件と判明）。地震被害に関しては、倒壊

身に染みる。半面、国内の企業や研究機関・大学等での各専門分野のソフト開発では、日本の組織での活動には疑問が残る。国内の「モノ」が全面に出る分野の研究者・技術者は待遇や業績評価での不利な状況もあり、海外の企業・研究機関等のチーム力や国際競争力の向上で、国内の技術が消滅の危機にあると感じる。建設関連の各企業が続々と自前の構造解析ソフトウェアを維持できなくなった事実を目の当たりにすると心配である。人災や各種の事故の予防には先進的な情報技術の継続した開発力が必須だが、気づいた時には主なフレームワークが海外製でブラックボックス化、専門性の高いアプリケーションも維持できないと言った事態にならないか、もちろん、国際的な共同もあるのだが課題は多い。

日本の

システムと情報化

とがある。

いまだ大規模自然災害や環境問題の認識が低く、大型複雑化する技術開発に



名城大学理工学部
建築学科教授
武藤 厚

むとう・あつし 建築構造工学、シェル・空間構造。名古屋大学大学院工学研究科博士後期課程建築学専攻、1961年生まれ。

や大被害は古い基準による設計で未対策のものがほとんどで、その後の大地震時も含め技術的には理解されるものの、公共・民間含めて既存不適格への対応という社会全体の課題に、我々がどう効果的に発信できるのか。

今までの日本的な個々の技術の高さや努力に依存して「何とか」してきた時代は終わりつつあり（無理が来た）、維持している個々の技術も種々の規制緩和の遅延により、国外での応用から周回遅れで逆輸入といった事態にならないように期待したい。個人が変化を恐れずに前進できるシステム（社会人・学生、共に変化に適合するための安心なシステム）の構築という社会問題の認識と解決が必要

一方、日々感じるのは情報技術の革新であり、記憶容量と速度の飛躍的な向上やネットワーク技術の進歩は質的にも大きな変化をもたらし、その恩恵は日々

